忘(わす)れ草(ぐさ)

加藤道子

南天の実のことごとく鵯の餌となり果てし夕庭に立つ

ひと月をいとほしみ来し山茱萸の終はりて窓にゆきやなぎの白

亡き夫が庭に据ゑにし信楽の手水(てうづ)の鉢にさみだれの落つ

かの夏に失くしし扇子思ひをり忘れ草咲く雨の窓辺に

朝かげは石蕗の花にそそがれて十月の庭黄に輝けり

つはぶきの花乱れそめほそぼそと庭に降る雨二日続けり

痛み残る膝庇ひつつ晩秋の庭に末枯れし朝顔を引く

いただきしさくら草の苗植うる背に初冬の日差しぬくきこの朝

日すがらを庭掃除する年の暮梔子の実の朱深まれり

あたたかき今日のさ庭に草を引き小枝を摘みてしばしを居りぬ